

平城京内における住宅の復原

建造物研究室

平城京内における貴族の邸宅と庶民の住宅について、各々の代表的な遺跡の復原模型の製作をおこなった。模型製作では検出した遺構にくわえ、その周辺部についても建物を想定して復原した。建物配置図には発掘区の範囲を示し、検出した建物と想定した建物を明確にした。

貴族の邸宅（左京三条二坊一・二・七・八坪 長屋王邸宅）の復原 貴族の邸宅として、長屋王の邸宅と推定される大規模な邸宅を復原した。発掘調査は1986から1989にかけておこない、その成果は『長屋王邸宅と木簡』（1991）として報告している。宅地は四町を占める京内では最大級の宅地で、特徴的なことは、宅地内を掘立柱塀によっていくつかの区画に分割していることである。内部を区画する掘立柱塀のうち、中心部を区画するものは屋根構造を伴ったものとし、柱穴内の礎盤に転用されていた流板の断片を参考にして流板葺とした。そして、出入口には棟門を構えた。いっぽう、中心部以外では柱上に笠木を置く簡単な形式とした。

SB4300の建つ区画は、邸内でもとくに軒瓦の出土量が多くて瓦葺建物の存在が推定されること、SB4300が四面庇付建物であること、区画内に井戸が存在しないことより、日常的な住居空間とは異質な空間、すなわち政務・儀式をおこなう空間を想定して建物の復原をおこなった。SB4300とその前面の2棟の建物は瓦葺建物とし、SB4300は四面庇付建物であるので入母屋造とした。SB4300は床東跡が検出されているので床張建物とし、遺構では確認されていないが四面に縁を設けた。また、組物は平三斗組とし、邸内で最も格式高い形式とした。

SB4500の建つ区画は邸内で最も中心となる住居施設として復原した。SB4500は桁行7間梁間4間の南北庇付建物である。両庇付建物であるので一般的には屋根は切妻造に復原されるが、

梁間が長く側面の立面が間延びするため、超一級貴族の邸宅正殿にふさわしい格を示すために入母屋造に復原した。床東跡が検出されているので床張りとし、四面に縁を想定した。組物は法隆寺伝法堂前身建物にならって大斗肘木とし、軒の出は、SB4500よりひとまわり大きな内裏正殿の軒の出（雨落溝を確認）である7.7尺より若干短い7尺とした。架構は梁間規模が近い新薬師寺本堂にならい又首構造とした。SB4490は切妻造とし、構造はSB4500にならった。

SB4680を中心とする区画は東隣の区画に準じる住居施設として復原した。したがって、SB4680の西には、東隣の区画と同じように正殿に近接する南北棟を想定した。SB4680はSB4500

貴族の邸宅建物配置図

に準じる建物として、組物は大斗肘木、軒の出は6尺、屋根は切妻造檜皮葺に復原した。

西北の区画には、桁行が長く建物内を8つの部屋に分割している長屋形式の建物SB4800がある。この建物は宿舎もしくは家政機関の建物と推定され、この区画の建物は主として板葺に復原し、比較的上質の雑舎や倉を想定した。SB4960は雑舎としては規模が大きく、この区画の中心部にはSB4960に見合う規模の中心的な建物を想定した。これら塀で囲まれた区画の東外側でも建物を検出しているが、いずれの建物とも規模が小さく、後述の庶民の家に近い形式に復原した。発掘調査を行っていない東北部には長屋王家に仕える人々の居住施設や廐・馬場を想定し、主として草葺建物を配した。

庶民の家（右京八条一坊十三・十四坪）の復原 庶民の住宅として、焼却場の建設にともなう発掘調査によって検出された奈良時代後半の小規模宅地を復原した。なお、発掘成果は『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』（1989）として報告している。西一坊大路に面する区画施設については、西一坊大路東側溝から大量の瓦が出土していることから、瓦葺築地塀を復原した。十三・十四坪間の坪境小路の南側では、奈良時代の前半に築かれた築地塀が存続しており、瓦出土量が少ないことから、上土塀とした。坪境小路の北側と十三坪・十四坪内を東西に二分する坪内小路に面した位置では、発掘成果にしたがい掘立柱塀を復原した。小路に面した宅地では、門遺構が確認されている位置および、掘立柱塀の柱間寸法が広がっている位置に門を復原し、門は門柱と冠木だけの簡略な形式とした。塀遺構は検出されていないが、建物・井戸の配置より宅地の境界と推定される位置については、自然木を打ち込んだ簡単な柵もしくは柴垣・植込の区画施設を想定した。

それぞれの宅地は以上のような区画施設に囲まれ、1/16町もしくは1/32町占地とする。宅地内には2棟から3棟の掘立柱建物と1基の井戸を配する。建物は桁行3間もしくは4間で、柱間寸法は5.5尺から7尺である。最も整った建物では片庇、床束を有する。主屋に相当すると推定される建物は板葺とし、付属屋と推定される建物は板葺もしくは草葺とした。板葺建物の構造は東堀川から出土した部材による復原（『平城京東堀川 左京九条三坊の発掘調査』1983）を参考とし、屋根構造は垂木・小舞上に板を張るものと、垂木を使用せずに流板葺とするものの二種を復原した。草葺建物の架構は現存する草葺民家の架構形式でも古い形式にあたる、真束を立てて垂木を葺降ろす形式とした。柱間装置は平安時代から鎌倉時代の絵図類を参考とし、出入口は板扉とし、窓は突き上げ窓もしくは、粗い連子窓とした。 （島田敏男）

庶民の家建物配置図